天津祝詞（禊祓詞）

あまつのりと　みそぎはらえのことば

高天原（たかあまはら）に　神留坐（かむづまりま）す
神漏岐（かむろぎ）　神漏美（かむろみ）の　命（みこと）以ちて
皇親神（すめみおやかむ）　伊邪那岐（いざなぎ）の大神（おほかみ）
筑紫日向（つくしひむか）の橘（たちばな）の小門（おど）の　阿波岐原（あわぎはら）に
禊祓（みそぎはら）ひ給（たまへ）ふ時になりませる

祓戸（はらえど）の大神等（おほかみたち）
諸々（もろもろ）　禍事（まがごと）　罪穢（つみけがれ）を　あらんをば
祓（はら）へ給（たま）へ清（きよ）め給（たま）ふと　申（もう）す事（こと）の由（よし）を
天津神（あまつかみ）　地津神（くにつかみ）　八百万（やおよろず）　神等共々（かみたちもろとも）に
聞食（きこしめ）せと　畏（かしこ）み畏（かしこ）みも白（う）す

大祓詞

高天原に神留り坐す皇親神漏岐・神漏美の命以て、八百万神等を神集へに集へ賜ひ、神議りに議り賜ひて、我が皇御孫之命は、豊葦原乃水穂之国を安国と平らけく知し食せと事依さし奉りき。如此依さし奉りし国中に、荒振る神等をば、神問はしに問はし賜ひ、神掃ひに掃ひ賜ひて、語問ひし磐根・樹立・草の垣葉をも語止めて、天の磐座放ち、天の八重雲を伊頭の千別に千別きて、天降し依さし奉りき。如此依さし奉りし四方の国中と、大倭日高見之国を安国と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて、皇御孫之命の美頭の御舎仕へ奉りて、天の御蔭・日の御蔭と隠り坐して、安国と平らけく知し食さむ国中に、成り出でむ天之益人等が、過ち犯しけむ雑雑の罪事は、天津罪、国津罪、許許太久の罪出でむ。如此出でば、天津宮事以て、天津金木を本打切り末打断ちて、千座の置座に置き足らはして、天津菅麻を本刈断ち末刈切りて、八針に取辟きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ。

如此宣らば、天津神は天の磐門を押し披きて、天の八重雲を伊頭の千別に千別きて聞し食さむ。国津神は高山の末、短山の末に上り坐して、高山の伊穂理、短山の伊穂理を撥き別けて聞し食さむ。如此聞し食してば、罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧・夕の御霧を、朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津辺に居る大船を、舳解き放ち艫解き放ちて、大海原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、焼鎌の敏鎌以て、打掃ふ事の如く、遺る罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を、高山の末、短山の末より、佐久那太理に落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比売と云ふ神、大海原に持ち出でなむ。如此持ち出で往なば、荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会に坐す速開都比売と云ふ神、持ち可可呑みてむ。如此可可呑みてば、気吹戸に坐す気吹戸主と云ふ神、根国底国に気吹き放ちてむ。如此気吹き放ちてば、根国底之国に坐す速佐須良比売と云ふ神、持ちさすらひ失ひてむ。如此さすらひ失ひてば、罪と云ふ罪は在らじと、祓へ給ひ清め給ふ事を、天津神、国津神、八百万の神等共に、聞し食せと白す。

龍神祝詞

高天原に坐し坐して　天と地に御働きを現し
給う龍王は　大宇宙根元の御祖の神にして一切
を産み一切を育て　萬物を御支配あらせ給う
王神なれば　一二三四五六七八九十の十種の
御寶を己がすがたと變じ給いて　自在自由に
天界地界人界を治め給う　龍王神なるを尊み
敬いて眞の六根一筋に御仕え申すことの由を
受引き給いて愚かなる心の数々を戒め給いて
一切衆生の罪穢れの衣を脱ぎ去らしめ給いて
萬物の病災をも立所に祓い清め給い　萬世界
も御祖のもとに治めせしめ給へと　祈願奉る
ことの由をきこしめして　六根の内に念じ申す
大願を成就なさしめ給へと　恐み恐み白す

略式祝詞

祓(はら)へ給(たま)へ

清(きよ)め給(たま)へ

守(まも)り給(たま)へ

幸(さき)わえ給(たま)へ